

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

第3回 すずきまさゆき 鈴木雅之

鈴木雅之という人

鈴木雅之は、天保8(1837)年、殖生郡南羽鳥村(現在の南羽鳥)に父清仁兵衛の長男として誕生。

幼少より父母に従って農耕に従事し、その間に独学で勉強していた。

生家の鈴木一族について研究したことがきっかけの一つで、わが国の古典や神道について研究するようになった。雅之は、村の鎮守熊野神社の由来を調べ、それが平安時代に紀州熊野神社の神官鈴木豊によって祭られ、鎌倉時代以降、広の台城主として栄えた鈴木一族に連なる家柄であることから、自身もその一族につながり、鈴木姓は本来穂積姓であることを知った。

安政2(1855)年、雅之は初めて神山魚貫について歌学と国学を学んだ。魚貫は当時67歳。歌集『苔清水』を発刊し、入門者も多く、その名を高めていた。この時、兄弟子である伊能穎則と交友が始まった。



上/鈴木雅之の著書
(成田山仏教図書館所蔵)

下/鈴木雅之の墓
(場所:南羽鳥)



天保8年～明治4年(1837～1871)

殖生郡南羽鳥村(現在の南羽鳥)に生まれる。国学者として幕末に活躍した。幼い頃から学問好きで、神山魚貫から和歌を学んだ。学問で身を立てることを決心した雅之は、郷里を出て遊学の旅をして学問の道に励み、寺子屋などの師匠をしながら国学の普及に努めた。

学問で身を立てることを決心

安政4年、20歳になった雅之は、母の生家の押畑村より、いとこの寿を妻として迎えた。夫婦の仲はむつまじかったというが、雅之は心の中で、学問の道を一生の仕事として定め、妻も家業も捨てる覚悟をすでに決めていた。両親や妻に、自分は農業に専心する気持ちがないこと、遊学の途に出たいということ打ち明け、家を出た。

遊学に出て、最初に仮住まいした先は、香取郡三倉村(現在の多古町三倉)であった。寺子屋の先生となって教える傍ら、国学の研究に専念していたという。その後、高萩村(現在の香取市高萩)に移り、同様の生活を続けたようである。このようにして雅之の20代は、寺子屋の師匠で生計を立てながら国学研究のため勉強の日々であったと思われる。雅之は『撞賢木』『民政要論』『治安策』など多くの著書を残し、なかでも『民政要論』は貧窮する農村を更生するため、農村の実情を治者に訴えることにより、農民の貧窮をなくそうと著わした。

明治に入り、伊能穎則から東京に招かれた雅之は、明治2(1869)年に大学少助教(東京大学の前身の大学校の助教授)に任ぜられた。ここで、鈴木雅之から穂積雅之へ改めた。かくして地方の一学者であった雅之は、ひのき舞台に立つことができた。

翌年には神祇官の宣教師中講義生に任ぜられた。輝かしい前途が予想されたが、明治4年4月21日、急病のためにこの世を去った。35歳であった。鈴木雅之の墓、成田山仏教図書館に所蔵されている79点の著書は、市指定文化財となっている。

参考:『成田市史』中世・近世編、江戸時代 人づくり風土記12

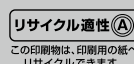
編集後記

最近、一眼レフカメラを買いました。半ば勢いでの購入でしたが、休日には外に出掛けて、動物や風景を撮影して楽しんでます。気候的に涼しいこの時季。物事に取り組むにはもってこいの季節として、「〇〇の秋」といわれます。私はまさに「芸術の秋」。シャッターチャンスに出会うため、いろいろな場所に出掛けようと思います。皆さんが今、興味を持っていたり、一歩踏み出そうか迷っていたりする事があれば、始めてみませんか。

平成29年9月15日号 No.1347

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。